

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32605

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00330

研究課題名(和文)戦後日本における中国文学の社会的・地域的受容の研究

研究課題名(英文)A Study of the Social and Regional Reception of Chinese Literature in Postwar Japan

研究代表者

藤澤 太郎 (Fujisawa, Taro)

桜美林大学・リベラルアーツ学群・准教授

研究者番号：30406847

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後の日本における中国文学の社会的・実践的な受容の形態を、主に「左翼文学運動での社会的・実践的な受容」、「山形県と秋田県を中心とした地域的な受容」、「外地引揚者による受容」の三点から検討していくもので、¹⁾ についての種村季弘と花田清輝の受容と ²⁾ についての鎌田政国の受容に関わる論文をこれまでに発表した。さらに ³⁾ では武田泰淳の、⁴⁾ では山形の学校教員の受容についての、⁵⁾ では上野英信の論考を準備中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、第一義的には中国文学受容の歴史的事実を究明しその中で生まれた特徴的な作品解釈を確認・提示することによって、中国文学研究の枠組で学術的な成果をあげることにある。同時にそれは、日本文学の中での中国文学の影響を明確化することでもあるため、日本文学の枠組にも広がる学術的な意味を持つものであり、さらに日本の社会運動における中国文学利用の明確化をすることによって、歴史学・社会学等の分野においても学術的な貢献ができるものである。

研究成果の概要(英文)：This study examines the forms of social and practical reception of Chinese literature in postwar Japan, mainly from three perspectives: (1) social and practical reception in the postwar leftist literary movement, (2) regional reception centering on Yamagata and Akita prefectures, and (3) reception by people repatriated from Manchuria and Taiwan. I have published papers on (1) the reception of Suehiro Tanemura and Kiyoteru Hanada and (2) the reception of Masakuni Kamata. In addition, I'm preparing a paper on (1) the reception by Taijyun Takeda, (2) the reception of school teachers in Yamagata, and (3) the reception by Eishin Ueno.

研究分野：中国文学

キーワード：中国近現代文学 魯迅 種村季弘 花田清輝 武田泰淳 上野英信

1. 研究開始当初の背景

中国の同時代文学 = 「近現代文学」は、同時代の日本語文学圏でも様々な形で受容され、解釈・研究とそれをふまえた再生産が行われてきた。その形態を整理すると、「外国文学」の一つとしての文学的な受容、大学などアカデミックな場における学術的受容、国語教育の場での教材の一つとしての受容という三つの形に大きく分けられる。この三種の受容形態は、量的にも多く相互に関連し合いながら日本における中国文学受容の主流を形成してきた。そのため、日本における中国文学受容史の研究も、基本的にはこの三つの形態のみを対象としてきたといえる。

しかしながら、同時にこの三種だけでは日本における中国文学受容の全体像を説明することができないことも確かであった。これらの他に、また別の目的と方向性を持った「草の根」的(= 民間的・社会的・地域的)な受容形態があり、その文脈の中にも優れた解釈・研究・再生産が存在していたからである。同時に、受容者の側ではそのように受容した要素をそれぞれの問題意識の中で創造的に再生産し、それぞれの文学運動・文化運動・社会運動を進展させる契機として利用していたことも指摘できる。

本研究の研究開始当初の段階では、このような「草の根」的(= 民間的・社会的・地域的)な中国文学受容についての研究は十分でない状況にあった。そのため、このテーマでの研究を通じて中国・日本に跨がる国境を越えた文学・文化の波及・再生産・交流等に関わる問題を整理し、様々な分野で利用するための基盤を構築しようと本研究を構想することになった。

本研究に関わる学問的な蓄積としては、日中双方で相当程度学問的な成果のある日本における中国近現代文学受容・解釈史の研究と、近年流行となっているサークル文学・文化運動など社会運動と連動した戦後日本の文学・文学研究の成果があった。

中国近現代文学受容・解釈史という点での主要な成果としては、日本国内の研究では『近代文学における中国と日本』(汲古書院、1986年)、藤井省三『魯迅「故郷」の読書史』(創文社、1997年)、『中国現代文学と九州』(九州大学出版会、2005年)等が挙げられる。中国でも、やはり草の根的な受容についてはほとんど言及されることがなかったが、孫歌『竹内好的悖論』(北京大学出版社、2005年)等をはじめ関連する研究が存在した。

また、日本文学研究、思想研究の文脈においては、近年このような草の根的な文学・文化活動の研究成果として道場親信『下丸子文化集団とその時代 一九五〇年代サークル文化運動の光芒』(みすず書房、2016年)、宇野田尚哉・川口隆行編『「サークルの時代」を読む 戦後文化運動研究への招待』(影書房、2016年)等の研究書が立て続けに刊行されてきていた。ただし、やはりこれらの活動と中国文学との関わりについては、ほとんど研究の手が付けられていない。

本研究では、上述したような先行研究を参考にしつつも、まずは基本的には新たな資料の発掘・整理という段階から研究を積み上げていく形となった。

2. 研究の目的

本研究は、研究開始の段階では以下の三つの問題意識を基礎としてスタートした。

- (1)日本の民間的・社会的・地域的な中国文学受容から中国文学の新たな解釈を見いだすことはできないか。
- (2)近代日本の文学運動・文化運動・社会運動への影響という部分で、中国文学があたえた意味を可視化していくことはできないか。
- (3)「草の根」的な立場から日中双方の「文学史」・「思想史」あるいは日中間の文学的交流史の書き替えができないか。

研究の目的はこの(1)~(3)の三つの問題意識と対応する形で、下記のように想定していた。

(1)これまで取りあげられてこなかった日本の社会的・地域的レベルでの中国文学の受容・解釈の形態を明らかにし、それを分析することで中国文学を解釈する新たな視点と論理を中国文学研究の枠組に提示すること。

「1」部分で記したように、日本における中国文学の受容は、学術的・文学的・教育的な受容の三方面について集中して研究が積み重ねられてきたが、このような従来の枠組には入らない中国文学受容の中にも、事象として興味深いものが多く含まれていた。例えば、秋田県出身の鎌田政国の魯迅受容などは筆者の研究以前はほとんど言及されることがなかったが、日本国内における最初期の中国文学受容の様態がわかるものであり、また日本国内における最初の魯迅翻訳である可能性を持つ点においても非常に重要な意味を持っている。このような点を明らかにすることは、中国文学研究の枠内で意味があることであると考えた。

(2)日本の草の根的な文学・文化運動・社会運動の展開と中国文学との関係を明らかにしていくことで、日本における文学・思想・社会等の中での潜在的な中国文学的論理を横断的に可視化し、「文学史」・「思想史」・「社会運動史」等を書き替えにつなげること。

民間・地域のレベルでの中国文学受容は、しばしば日本の地域的な文学活動・社会運動と密接

に関わっていた。東北地方においては、魯迅は宮沢賢治と並ぶ中央に対抗するための地域連帯のシンボルとして機能してきた部分があり、また各県教職員組合等の運動の象徴としても位置づけられていた。この方向性は近年研究が盛んになっている戦後のサークル文化運動の問題とも密接に関わるものである。その意味で本研究は、日本の文学史・文化運動史・社会運動史等の書き替えへとつながっていく方向性を持つものであり、その点も研究の大きな目的の一つとして想定した。

(3)比較文学的視点を取り入れつつこれまで看過されていた問題を日中間の相互作用という点において論じることで、日中間の文学文化運動・社会運動の相互作用についての新たな側面を明らかにすること。

本研究で扱う事例は基本的には日本国内における中国文学の受容・解釈という方向性のものであるが、このような日本の地域的な社会運動の文脈は日中間の文学交流の中で、中国にも一定程度影響をあたえていた。本研究の射程はそのような中国での状況も含んだ日中間の相互作用を明らかにして、結果として日中双方の「文学史」「思想史」の書き替えへとつなげていく点も目的の一つであった

3. 研究の方法

本研究は、まず草の根的中国文学の受容と関わる具体的な小テーマを設定してそれぞれについて個別に検討し、最後にそれを総合する形で全体的な結論を導き出していくという手順を進めていくことを予定していた。個別のテーマとして準備していたのは、主に下記(1)~(4)の4つのテーマと、補足的な問題として(5)であった。

(1)山形県における受容

山形県庄内地方は、独自の文化圏を形成してその中で中国文学を受容してきた。その活動は、1930年代の齋藤秀一を起点とし、戦後の吉野弘等の詩誌『罅』の活動や佐高信など学校教職員のサークル活動へとつながっている。この部分では、それぞれの活動とつながりを明らかにしながら、その中で中国文学の新しい解釈・再生産の要素を析出していくことを目指した。

また、山形県の村山地方と最上地方は、庄内地方とは別の文化圏にあり、戦前から魯迅作品をはじめとする中国文学を受容していた。ここでは、戦前山形で活動をしていた三浦矢一郎等若い詩人群の活動を起点とし、戦後の農民運動系文芸誌『地下水』や宮沢賢治研究誌『ポランの広場』等を舞台とした中国文学を受容とアイデンティティ形成についてまとめていく方向でも進めた。

(2)秋田県における受容

秋田県は、鎌田政国や青江舜二郎等を輩出するとともに、戦前・戦後にかけて武野武治(むのたけじ)の『たいまつ』の運動や農民運動的な立場から独自の文脈で中国文学を受容していた。この部分では筆者の先行的研究である「ある魯迅翻訳者の生涯 日本最初期の魯迅翻訳者鎌田政国について」の成果も取りこみながらその系譜をまとめ、その中で新しい解釈・再生産の要素を析出していくことを目指した。

(3)戦後日本の左翼文学運動と学生・職業団体の文学活動等の中での受容

この部分では、戦後左翼文学をリードした新日本文学会を出発点とする中央の左翼的文学の流れを『新日本文学』『人民文学』『民主文学』『葦牙』等の文芸誌を中心に整理し、その中で中国文学受容の動向を析出するとともに、その支流としての地域的な動きと合わせて総合的に問題を分析していくことで、(1)(2)の局地的な分析を全国的な広範囲の動きの中に結びつけていくことを意図した。

また、それと合わせて、学生文芸誌や職業団体文芸誌における魯迅受容についても検討を行った。

(4)台湾・「満洲」(関東州、「満洲国」)からの引揚者等による受容

戦前日本統治下の台湾や「満洲」の日本語文学圏では、内地とは別の文脈で中国同時代文学の紹介と受容がなされていたが、その一部は戦後各地に引揚げた後も継続するものであった。ここでは戦後の問題を扱う補助線としてこの流れを整理・分析していくことを目指した。

(5)各地の地域的受容

(1)(2)の問題をより的確に分析していく参照軸として、他地域での地域的な受容についても補足的に調査を行った。

最終的には、(1)~(5)の研究の進展に合わせて、それらの中国文学受容の成果を統合し、中国文学解釈・再生産につながる部分をまとめていくと同時に、それが日本の文学運動・文化運動・社会運動の発展に結びつく流れを析出していくことで、二つの方向から全体に通底する大きな論理を明らかにしていくことを目指した。また同時に、これら日本における活動の中国での影響についても分析を行い、日本と中国の文学的・思想的相互作用という点から整理していくことを

企図していた。

4. 研究成果

本研究は、当初の想定では、上記「3」の部分で記した内容のうち「山形県における受容」「秋田県における受容」「外地からの引揚者等による受容」「各地の地域的受容」を中心とした地域的な中国文学受容の分析を一つの軸に据え、それと並立させて対照させていく形で中央の「戦後日本の左翼文学運動と学生・職業団体の文学活動等の中での受容」の調査研究を進めていくことを意図していた。ただ、研究を開始した2021年度の段階ではコロナ・ウィルス蔓延にともなう移動・活動の制限が解消されておらず、結果的に関東圏以外での調査を後回しにせざるを得ない状況になっていた。

そのため、本研究は実施段階においては首都圏を中心とする「戦後日本の左翼文学運動と学生・職業団体の文学活動等の中での受容」の調査研究を優先させ、それ以外の「山形県における受容」「秋田県における受容」「外地からの引揚者等による受容」「各地の地域的受容」の部分は2022年度から本格的な研究を開始することとなっている。

(1)「戦後日本の左翼文学運動と学生・職業団体の文学活動等の中での受容」の部分では、まず『新日本文学』『人民文学』『民主文学』『葦牙』等左翼的文学の柱となる文芸雑誌を閲覧してその中から中国文学関係の記事を収集して流れを整理するとともに、学生雑誌、職業団体雑誌サークル雑誌等細かな図書館等に所蔵がない雑誌の収集閲覧に努めた。このうち種村季弘が学生時代に関わった雑誌『望楼』は、公的機関に所蔵がなくこれまで取り上げられることのなかったため優先的に整理を進めて「種村季弘の魯迅論「魯迅と希望」 雑誌『望楼』、花田清輝、『故事新編』受容をキーワードとした覚書」として論文化している。これは種村季弘が雑誌『望楼』に発表した魯迅論「魯迅と希望」の分析を出発点に、新日本文学会の花田清輝の魯迅受容と結びつけながら日本における民間的魯迅受容・『故事新編』受容を論じていったものである。

この論考が魯迅の『故事新編』受容に関わるものであったため、引き続いて「外地引揚者による独自の中国近現代文学の受容」のテーマの観点と合わせる形で上野英信の中国文学受容について首都圏と福岡県を中心に調査分析を進め、上野英信の『故事新編』受容のテーマで論考を準備中である。

また、この方向での副次的なテーマとして武田泰淳の魯迅受容についての資料整理を進めており、論文「武田泰淳の魯迅受容 「ひかりごけ」における解釈を中心に」の発表を準備している。

(2)「山形県における受容」については、首都圏と山形県で『地下水』『雪国』『ポランの広場』をはじめとした雑誌群と関連資料の収集を進めた。これらは三浦矢一郎に関わる問題、齋藤秀一に関わる問題、教員の魯迅受容と問題等の軸に沿った整理を進めており、特に魯迅受容と宮澤賢治と並ぶ象徴化の問題について先行して論文化を進めているところである。

(3)「秋田県における受容」については、戦前部分については鎌田政国に関わる問題を整理してその鎌田政国についての記述を含んだ「魯迅在日本の早期接受状況速写」を発表した。また、戦後部分については、『たいまつ』をはじめ武野武治（むのたけじ）に関わる資料を収集分析し、上記(2)の調査内容と合わせて佐高信の魯迅受容の問題を含む論考として発表することを準備している。

(4)論旨を補足する意味で高知県、沖縄県をはじめとした日本国内他地域での地域的な中国文学受容についても調査を行った。このうち高知県の福岡誠一の魯迅認識と満洲引揚詩人による中国文学受容の問題として発表に向けた部分については、一つの論考としてまとめる予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 藤澤太郎	4. 巻 4797
2. 論文標題 魯迅在日本的早期接受情况速写	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文芸報	6. 最初と最後の頁 6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤澤太郎	4. 巻 4
2. 論文標題 種村季弘の魯迅論「魯迅と希望」 雑誌『望楼』、花田清輝、『故事新編』受容をキーワードとした覚書	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 桜美林大学研究紀要 人文学研究	6. 最初と最後の頁 295-279
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------